

# 知的障害のある小学1年生の表現力をつけるための合理的配慮

## 1. 事例の概要

A児は、B小学校の知的障害特別支援学級に在籍する、軽度の知的障害及びADHDの傾向がある小学校1年生である。本件は、話したいという思いは強いものの、話の内容が他の児童には伝わらない状態のA児に、表現力をつけるための合理的配慮の事例である。

合理的配慮の内容については、言語聴覚士（ST）のアドバイスも参考にするなど、外部専門家も活用した。

**キーワード** 知的障害、表現力、外部専門家、交流及び共同学習

## 2. 児童の実態

A児は、B小学校の知的障害特別支援学級に在籍する1年生である。話すことが大好きで、話したいという思いはとても強いが、時系列がばらばらで話がまとまらず、他の児童に話の内容が伝わらずに、トラブルになることがある。

また、多動や不注意の傾向があり、整理整頓や片づけが苦手である。掃除等も意欲的にしようとするが、どこから始めるかなどの順番や方法が分からず戸惑うことが多い。他の児童の話や周囲の状況が気になり、集中力が持続しないこともある。

発達検査の結果からは、聴覚情報の入力による理解より、視覚情報による理解や思考の方が得意であることが分かった。

## 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B小学校のあるC町では、外部専門家の臨床心理士、言語聴覚士（ST）、作業療法士（PT）の助言を受けられる体制をとっている。B小学校においては、助言を受けて校内委員会で支援内容の検討を行い、指導体制を整えている。【基礎2】
- C町では、学校からの要請により発達支援巡回相談員が学校を訪問し、児童生徒の学習時の様子を確認したり、担任等に支援方法についての助言を行ったりしている。【基礎6】
- C町では、月に1回程度、言語聴覚士をB小学校に派遣し、言語理解や表現力向上に必要なトレーニングの個別指導を行っている。また、年に2回程度、作業療法士を派遣し、身体の使い方の評価や支援方法についての指導を行っている。B小学校の特別支援学級では、それらの指導を活かして、個に応じた指導を行っている。【基礎7】

## 4. 合意形成のプロセス

他の児童と仲良く遊んで欲しい、関わって欲しいという保護者の願いを受け、他の児童とのトラブルの原因でもあるA児が苦手としている表現力を高めるため、発達支援巡回相談員、臨床心理士、保護者、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任による支援会議を開催した。同会議において個別の教育支援計画を作成し、A児の小学校3年生終了時までを見据えた目標、及び支援内容を決定した。

表現力を高めることの他に、2年生までの国語の内容をできるだけ身につけさせるということ、また意欲的に取り組ませるためにA児が興味のあることや視覚的資料を取り入れて楽しく学べるようにすることなどを確認した。保護者には定期的にA児の様子を見ていただくようにした。

## 5. 合理的配慮の実際

- A児が順序よく事柄や自分の気持ちを表現できるように、順序を示すカードを準備した。「いつ、どこで、だれと、どうした」を意識しながら話ができるようにカード（写真1）を使用し、スムーズに話せるようになったら「ようす、気持ち」のカードを増やしていった。【合理①-1-1】



写真1 順序を示すカード

- A児が助詞を正しく使って文が作れるようにするため、言語聴覚士からの助言をもとに、助詞カードを活用し、文中の空白に助詞カードを置いて正しい文を作る練習をした（写真2）。【合理①-1-1】

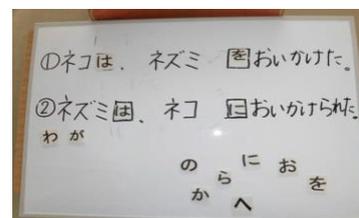


写真2 助詞カードの活用

- 日記を書く時には、状況を思い出す手がかりになるよう、写真を活用した。【合理①-1-1】

- 通常の学級での音読発表会では、読み間違いを減らせるように事前に特別支援学級で練習を行った。発表会では、グループに分かれ、一人が一段落を担当することになったため、通常の学級の担任と相談し、短くて繰り返しが多い段落を担当するようにした。練習を重ねることで、間違いずに読めるようになり、音読への意欲につながった。【合理①-2-2】

## 6. 本事例の成果と課題

A児が順序立って事柄や自分の思いを適切に伝えられるように、順序を示すカードを使用した。また、助詞カードを使って、ゲーム感覚で助詞の使い方に慣れさせたりすることで、「いつ、どこで、だれと、どうした」を意識した話し方ができるようになってきた。また、交流及び共同学習においては、特別支援学級担任と通常の学級担任とが連携をとりながら、A児の学習をすすめるようにすることで、A児は自信をもち、他の児童との関係も少しずつ築けてきている。